

〈論 文〉

群馬県方言におけるべー類の動態

—若年層に対する30年間の経年調査から—

The usage pattern of "bee" in Gumma Prefecture Dialect

From the long-term 30 year investigation of usage by the younger age group

佐藤高司 (共愛学園前橋国際大学)

Takashi Sato (Maebashi Kyoai Gakuen College)

キーワード：群馬県方言，べー類，新方言，接続の単純化，方言の「アクセサリー化」

要旨

本論文の目的は、群馬県の若年層における方言べー類の形態及び用法の変化の様相を考察することである。本論文の方法は、1980年～現在の30年間に於ける3回の経年調査結果をもとに、若年層における使用率を比較することで、べー類の使用傾向を把握するという手法である。

結論は、次の(1)～(3)である。(1)意志・勧誘のべー類では、1980年～1992年に、接続の単純化が進み男子若年層では新方言ンベーが発生し広まった。1992年～現在では、べー類の使用は減少傾向にあるが、接続の単純化が進行中である。(2)推量のべー類では、1980年～1992年に、意志・勧誘の影響を受け推量のンベーも使用を伸ばした。1992年～現在では、べー類の使用は減少傾向だが、推量のダンベーからべーへの切り替えと動詞や形容詞への単純接続は進行中である。(3)最近の新たな動きとして、女子若年層がべー類を男子若年層よりも多く使用する傾向が見られた。男性方言と考えられてきたべー類に、共通語化と女子若年層の方言ブームとを背景に、方言の「アクセサリー化」が起こったためと考えられる。

1980年代～現在までの30年間に於いて、群馬県方言におけるべー類は、新方言ンベーの発生や推量のダンベーからべーへの切り替えと接続の単純化、「アクセサリー化」や「おもちゃ化」など、形式面・文体面で様々な変化を活発に起こしてきた。これらの変化に、べー類が衰退していく姿と共通語化にあらがい群馬県方言の中に根強く生き続けようとする姿との両面を見ることができよう。今後も継続した観察と考察が必要である。

Abstract

This paper observes how the usage pattern of "bee" by the younger age group of Gumma Prefecture has changed over the last 30 years.

The conclusions are as follows: (1)On "bee" of will and invitation, from 1980 to 1992, particle-izing in order to simplify connections evolved, while a new form "nbee" spread among the male group. After 1992, the use of "bee" was decreasing, but particle-ization continued. (2)

On "bee" of conjecture, from 1980 to 1992, the usage rate of "nbee" was also extended, under the influence of will and invitation. After 1992, the use of "bee" continued decreasing, but the change of form into "danbee" in the usage of conjecture and simplified connections with a verb and an adjective has been in progress. (3) It is the latest trend for the female group to use more "bee" than the male, who had mainly used it. This tendency has been caused by both "Accessor-izing" of a dialect and common-language-izing, which resulted in a dialect boom among the younger women.

Although "bee" is on the decline, it is still used widely and is resisting common-language-izing. The reason for this is that various changes we observed above have taken place.

1. はじめに

現代日本語のべー類の分布地域は、井上(1984)によれば「東日本の大部分にほぼ連続した地域」(井上,1984:75)¹⁾である。井上(1984)の後に完成した『方言文法全国地図』(GAJ)で確認すると、意志形のべー類は、東日本に分布し、その西端は群馬県と長野県の県境、山梨県東端、伊豆半島(伊豆諸島を含む)である。東日本でも秋田県や新潟県、日本海側には意志のべー類の分布は認められず、福島県から宮城県の太平洋側を中心にべが分布する。推量形においては、意志形の分布と比較してみると、両者を区別なくべーで表す地点が東北全般に多い一方、意志をべー、推量をダンペー・ダッペーとダの挿入で区別する関東地方、意志をべ、推量をべーと長さで区別する福島浜通り、そして、意志には別語形を用い推量のみをべ(+終助詞)を使う青森・秋田など、いろいろな組み合わせが認められる。

このような中であって群馬県方言は、「あたかも東日本の「ベイことば」を一同に集めた「ベイことばの坩堝」といった感がある」(篠木,1984:107)と表現されるほど、べー類の形式が豊富である。したがって群馬県におけるべー類の観察は、東日本におけるべー類の変容に関する研究に大いに貢献するものと期待される。

本論文の方法及び目的は、1980年～現在の30年間における3回の経年調査結果をもとに、群馬県の若年層におけるべー類(意志・勧誘・推量など)の使用に着目し、使用率を比較することで、べー類の形態及び用法の変化の様相を考察することである。

2. 群馬県方言におけるべー類

篠木(1987:15)及び古瀬(1997:39)等を参考に、1980年当時の群馬県方言のべー類の概要を整理すると、次の(1)、(2)のようになる。

(1)意志・勧誘では、「動詞+べー」が用いられる。

○明日、東京へ行グべー。(意志)

○一緒に映画を見に行グべー。(勧誘)

(2)推量では、「動詞・形容詞・名詞+ダンペー(ダッペー)」が用いられる。

○きっとあの人も行グダンペー。(推量)

○まだはえー(早い)ダンベー. (推量)

○あの子はどこの子ダンベー. (推量)

なお、かつての群馬県方言では、東北地方同様に意志・勧誘・推量すべてをベーが担っていたが、「共通語の「だろう」の影響を受けて、関東地方においていち早く推量表現にダンベーを誕生させたと考えられる」(篠木, 2008a). 上記(1), (2)は、1980年当時の都市部を中心とする群馬県下の広い地域の概要であり、群馬県の周辺部²⁾には推量にベーとダンベーとを併用する地域がある。推量にベーとダンベーを併用する地域では(3)のようになる。

(3)推量では、(2)に加え「動詞・形容詞+ベー」も用いられる。

○きっとあの人も行グベー. (推量)

○まだ早かんベー. (推量)

3. ベー類の変化に関する先行研究

現代東日本のベーク類の変化に関して、井上(1984)は、平山(1961)等³⁾に東京—山形間のグロットグラム(東北本線・奥羽本線ぞい)の調査結果を加えて考察している。そこでは、ベークが活用を持たず接続も単純な終助詞としての方向へ変化していることを指摘している。また、推量において、全国的分布図の考察からすべてにダンベをつけて意志と使い分けるという傾向を指摘しつつも、グロットグラム調査からは、推量のすべてにダンベを用いる方向への変化は活力を失い、むしろ推量と意志の使い分けを失う変化が進んでいることを指摘している。

群馬県方言のベーク類に関して、篠木(1994)は、1983年に本間芳枝氏が実施した調査資料をもとに高年層・青年層のベーク類の使用を比較し、井上(1984)を参照しつつ、変化過程を考察している。そこでは、群馬県においてもベークが終助詞化しているとしている。また、動詞に関してかつては意志も推量もベークによってなされていたものが、「意志表現ベ／推量表現ダンベ」と使い分ける方向へと進み、さらに1983年当時、群馬県東部を中心にダンベ類を放棄し再びベーク類のみになるうとする新たな変化が生じていると指摘する。そこでの新しいベーク類の形式は「撥音を添えた形でのベーク類」である。これは、佐藤(1993)において群馬県の若い世代に発生及び広がりを見せているとした地方型の新方言⁴⁾「ンベーク」である。

4. 調査地域と調査の概要

4. 1 調査地域

篠木(2008b)によれば、群馬県方言の大部分は、埼玉県北部・西部とともに関東方言の西北部方言に属し、群馬県の東南部の邑楽地区は埼玉県東部、千葉県、栃木県西部とともに関東方言の東南部方言に属する。中沢政雄と上野勇は、関東方言の西北部方言に属する群馬県の大部分をさらに北・西の山間部と中部の平坦部の2つに区画する。

本論文では、これらの方言区画に行政区画を加味し、群馬県を5地域に区分し、利根沼田、吾妻、西毛、中毛、東毛と呼ぶ(【図1】参照)。

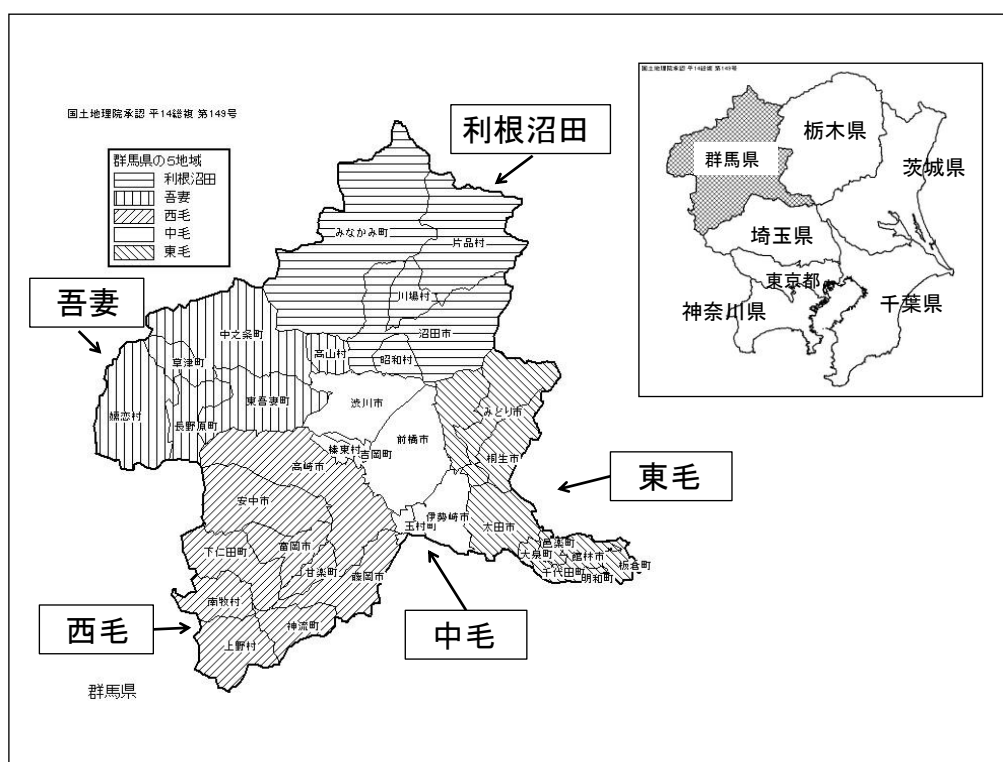
4. 2 調査の概要

調査は多人数のアンケート(各高校及び高専に実施依頼)により、群馬県内の高校生・高専生を対象に行った。

第1回調査は、調査項目に対し複数の選択肢を用意し、それぞれの選択肢に対して「よく使う言い方」「時々使う言い方」「今は使わないが昔使った言い方」があれば指定の記号をマークしてもらうというアンケート調査である。いずれにもあたらなければ空欄(マークなし)となる。マークされていれば「使用」としてカウントする。場面としては家族や友人と何の気兼ねもなく話すときのくだけた言い方を尋ねている。

第2回調査と第3回調査は、同じ調査用紙である。調査項目に対し複数の選択肢を用意し、それぞれの選択肢に対して使うか使わないかのいずれかをマークしてもらうというアンケート調査である。使うにマークされていれば「使用」としてカウントする。場面としては特に親しい友達と話す場合を尋ねている。

調査項目と選択肢は【表1】のとおりである。【表2】は調査の概要である。



【図1】調査地域

調査	用法	調査項目	選択肢
第1回	意志・ 勧誘	はやく「行こう」	イコー, イゴー, イグバー, イグンバー, その他
		映画を「見よう」	ミヨー, ミバー, ミルバー, ミンバー, ミルンバー, その他
	推量	あの人はきっと「来るだろう」	クルダロー, クルバー, クルダンバー, クルンバー, その他
		この本は「おもしろいだろう」	オモシロイダロー, オモシロイバー, オモシロカンバー, オモシレーダンバー, オモシレンバー, その他
第2・3回	意志・ 勧誘	行こう(べ・ぺをつけて)	イグ(イク)ペー, イグ(イク)ンバー, イグ(イク)ピャー, イグ(イク)ッペ, その他
		いっしょに映画を見よう(べ・ぺをつけて)	ミバー, ミルバー, ミンバー, ミルンバー, ミピャー, ミルッペー, その他
	推量	いつ <u>来る</u> の <u>だろう</u> (べ・ぺをつけて)	クルダンバー, クルバー, クルンバー, クンダバー, クンダへ, クンバー, クンダッペ, その他
		この本は <u>面白い</u> <u>おもしろい</u> <u>だろう</u> (べ・ぺをつけて)	オモシロイダンバー, オモシロカンバー, オモシレーダンバー, オモシレンバー, オモシロイバー, オモシレーバー, オモシレッペ, その他
		犬 <u>だろう</u> (べ・ぺをつけて)	イヌダンバー, イヌダベ, イヌダッペ, その他

【表1】べー類に関する調査項目及び選択肢等

調査名	期間	学校	実施学年	有効数
第1回調査 (1980年)	1980年 10月～11月	群馬県立高校19校 栃木県立高校1校	高校1・2年生	男子610名
第2回調査 (1992年)	1991年11月～ 1992年3月	群馬県立高校17校 栃木県立高校1校	高校2年生	男子600名 女子504名
第3回調査 (2010年)	2008年9月～ 2011年2月	前橋市立高校1校 国立群馬工業高等専門学校 1校 群馬県立高校7校	2008年度 高校1・2年生 2009年度 高校1・2年生 2009年度 高専3年生 2010年度 高校1～3年生	男子329名 女子367名

【表2】調査の概要

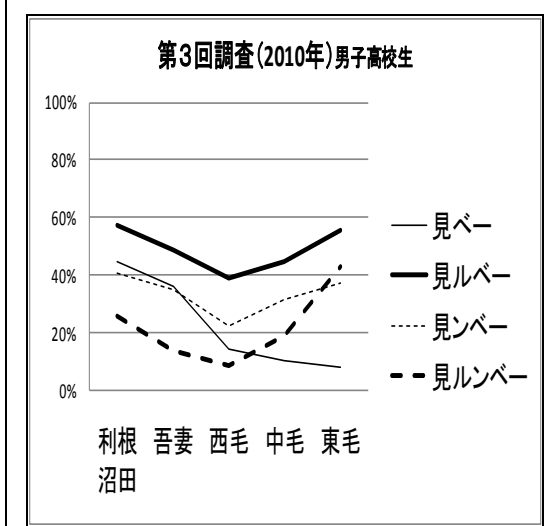
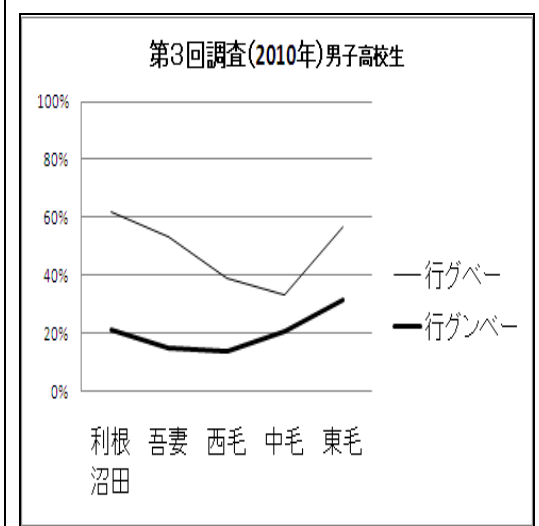
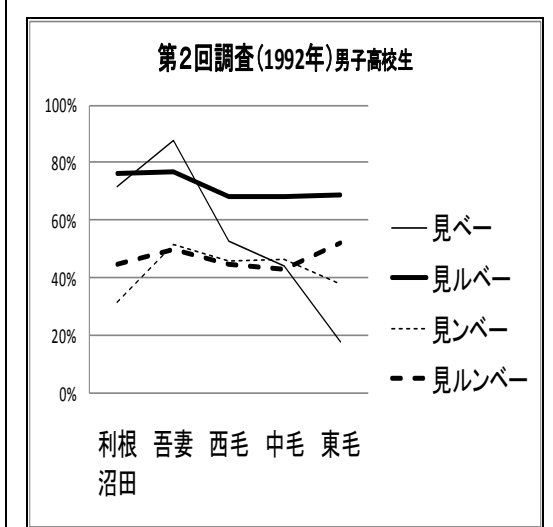
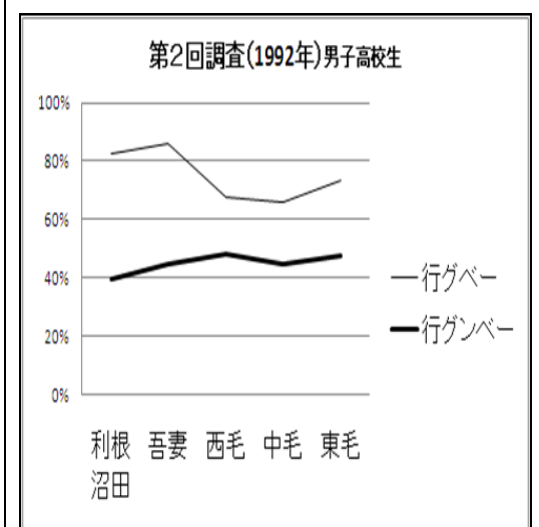
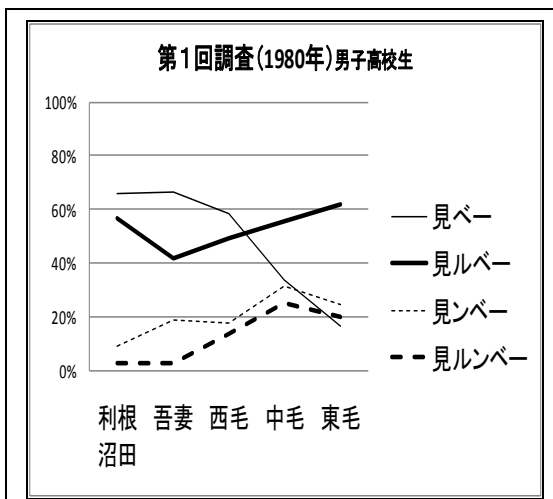
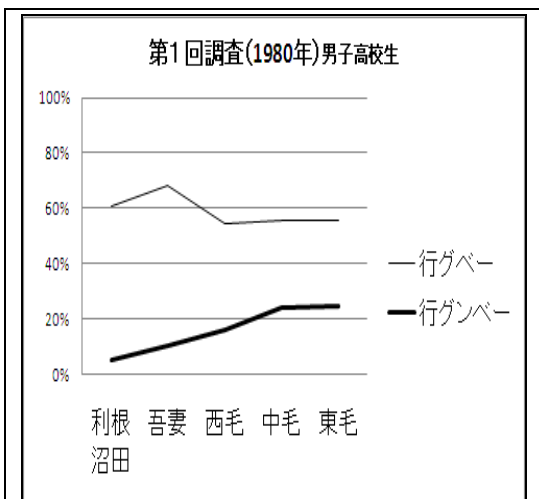
5. 意志・勧誘のべー類

【図2】は、「行こう」をくだけた場面で言う場合の「行グベー」、「行グンベー」の使用率の変化を表した図である。第1回調査では「行グベー」が優勢である。また、東毛や中毛で新方言「行グンベー」が発生し広まる兆候が見られる。第2回調査では、「行グベー」が依然優勢であるが「行グンベー」が群馬県全域に広まっている様子がうかがえる。べーの新方言ンベーは、撥音を多用する群馬県方言の音声的特徴を背景にル語尾動詞のルの撥音化を介して生じたと考えられる。第3回調査では、「行グベー」、「行グンベー」ともに減少傾向が見られ、若年層のべー類がそのバリエーションを含めた全体として衰退傾向にあると考えられる。

【図3】は、「見よう」をくだけた場面で言う場合の「見ベー」、「見ルベー」、「見ンベー」、「見ルンベー」の使用率の変化を表した図である。まず、新方言ンベーの形式である「見ンベー」と「見ルンベー」の変化を見てみよう。第1回調査では、「行こう」同様に、中毛、東毛で発生、広まりの兆しを見せている。第2回調査になると、「見ンベー」、「見ルンベー」ともに群馬県全域に広まり、第1回調査時では「見ンベー」よりも使用率の低かった「見ルンベー」が、「見ルベー」と呼応するかのように急成長を遂げている。第3回調査では、両者ともに使用率を下げ、特に「見ルンベー」の使用率の減少が吾妻、西毛、中毛で目立つ。ただし、利根沼田、東毛では両者とも使用率を維持している。

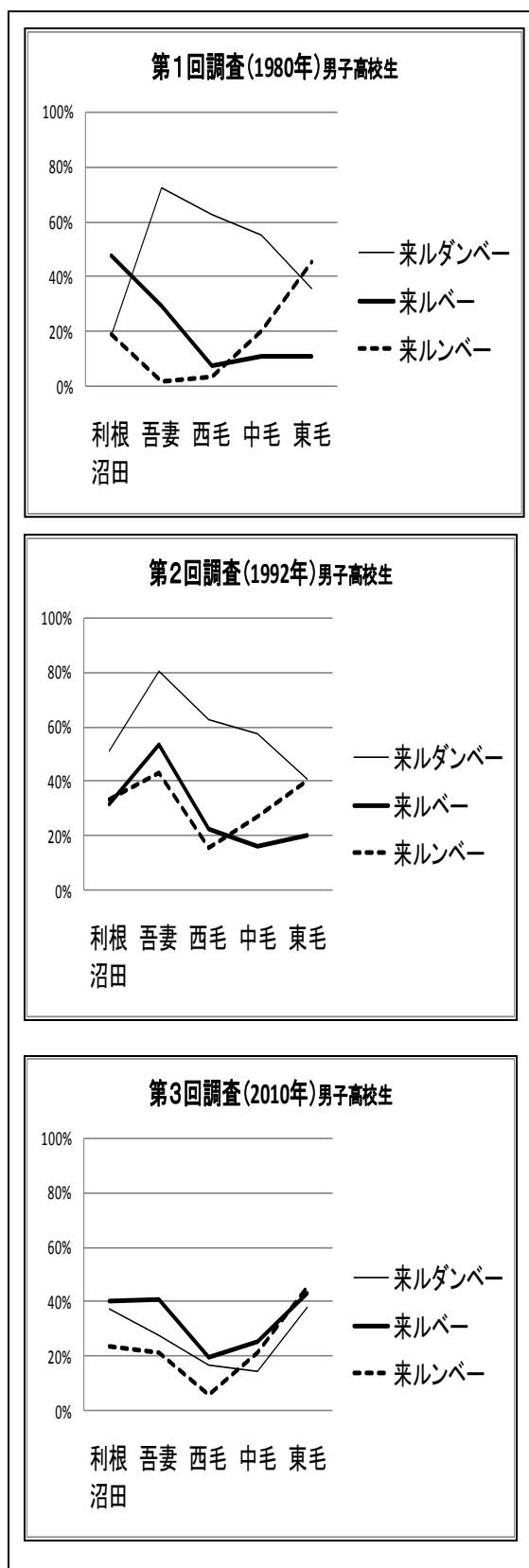
次に、「見ベー」と「見ルベー」の変化を見てみよう。第1回調査では、利根沼田、吾妻、西毛で「見ベー」が、中毛、東毛で「見ルベー」が優勢である。第2回調査では、利根沼田、吾妻、西毛でも「見ルベー」が勢力を伸ばし、群馬県全域で盛んに使用されている。従来の形式は「見ベー」であるので、「見ルベー」の台頭により「見ベー」から「見ルベー」への交代がうかがわれる。第3回調査では、べー類全体の衰退が目立ち、中でも「見ベー」の衰退が著しい。「見よう」においてもべーはそのバリエーションを含めた全体が衰退傾向である。ただし、「見ルベー」は使用率を下げてはいるが、依然優勢である。接続の単純化は進行中であると考えられる。

以上より、意志・勧誘のべー類では、1980年～1992年に、接続の単純化が進み、男子若年層では新方言ンベーが発生し広まる傾向が見られた。新方言ンベーは、群馬県方言の音声的特徴を背景にル語尾動詞のルの撥音化を介して生じたと考えられる。1992年～現在では、べー類の使用はそのバリエーションを含めた全体として衰退傾向にあるが、べーの接続の単純化は進行中であると考えられる。



【図2】「行く」使用率の変化

【図3】「見よう」使用率の変化



【図4】「来るだろう」使用率の変化

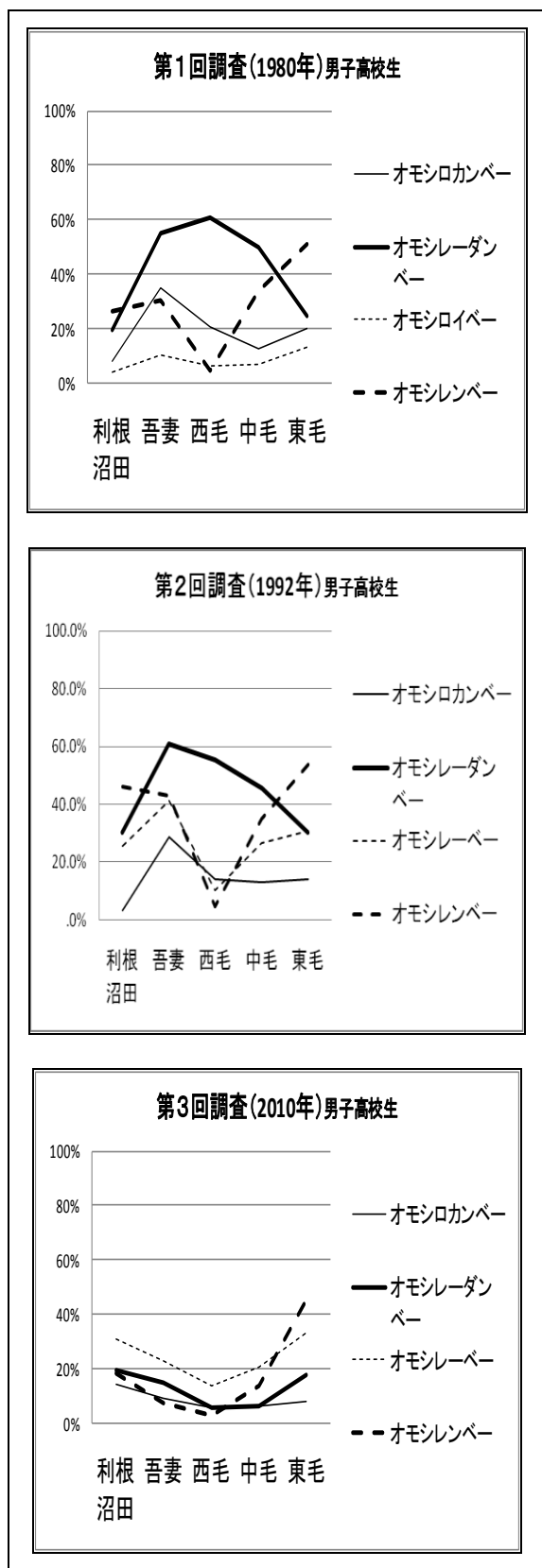
6. 推量のべー類

【図4】は、「来るだろう」をくだけた場面で言う場合の「来ルダンバー」、「来ルバー」、「来ルンバー」の使用率の変化を表した図である。

第1回調査では、吾妻、西毛、中毛で「来ルダンバー」が、利根沼田で「来ルバー」が、東毛で「来ルンバー」が優勢である。利根沼田には推量にべーを使用する古い形式が残り、吾妻、西毛、中毛では推量のべーからダンバーへの交代がなされ、東毛ではさらに新しい形式の新方言ンバーが広まり始めていると考えられる。

第2回調査になると、利根沼田でも推量のべーからダンバーへの交代が済み、群馬県全域で「来ルダンバー」が優勢である。一方、東毛から発生した新方言「来ルンバー」も全域への広がりを見せている。また、利根沼田を除き「来ルバー」も使用率を伸ばしている。

第3回調査では、全域で「来ルダンバー」の勢力が衰え、新方言の「来ルンバー」にも若干の衰えが見られる。その中において、「来ルバー」だけは依然勢力を維持しており、推量のダンバーからべーへの交代と動詞への単純接続が進行中であると考えられる。



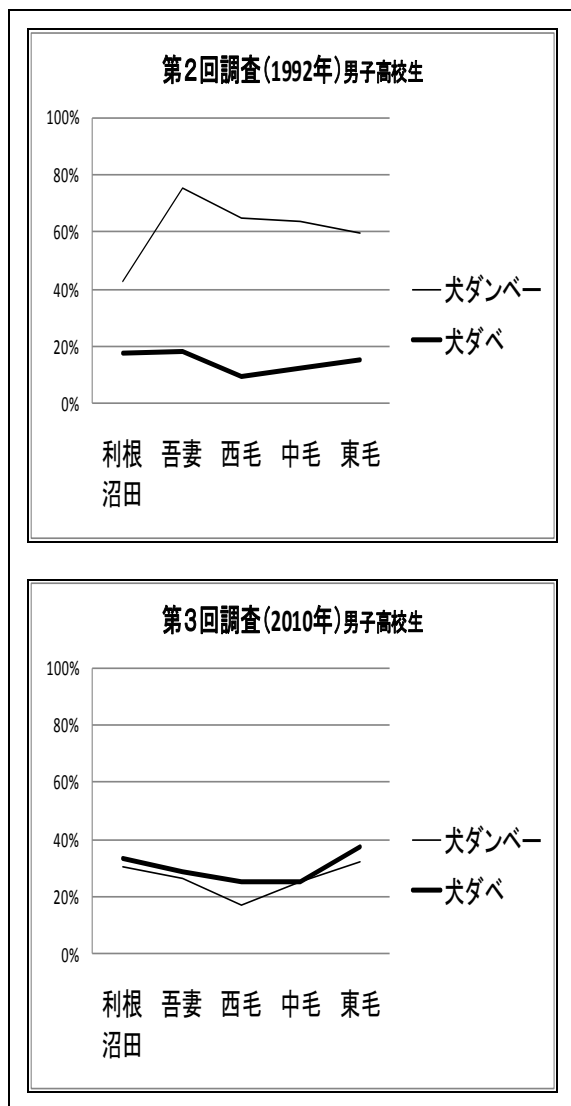
【図5】「面白いだろう」使用率の変化

【図5】は、「面白いだろう」をくれた場面と言う場合の「オモシロカンペー」、「オモシレーダンペー」、「オモオシロイ（レー）ペー」、「オモシレンペー」の使用率の変化を表した図である。

第1回調査では、吾妻、西毛、中毛で「オモシレーダンペー」が、利根沼田と東毛で「オモシレンペー」が優勢である。形容詞の推量の古い形式「オモシロカンペー」は吾妻に多く残ってはいるが、ダンペーへの交代はほぼ完了しているとみてよい。西毛を除き新方言「オモシレンペー」が広まり始めていると考えられる。

第2回調査を見ると、「オモシレーダンペー」の勢力は第1回調査とほぼ変わらない。新方言「オモシレンペー」は西毛を除き広がりの様相を見せている。また、西毛を除き「オモシレーペー」が使用率を伸ばしている。

第3回調査では、全域で「オモシレーダンペー」、「オモシロカンペー」の勢力が衰え、新方言「オモシレンペー」も東毛以外で衰えている。しかし、「オモシレーペー」だけは「来ルペー」同様に勢力を維持しており、形容詞においても、推量のダンペーからペーへの交代とへの接続の単純化が進行中であることがうかがわれる。



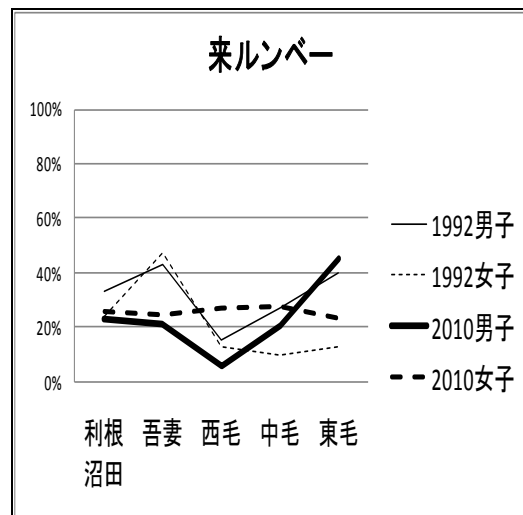
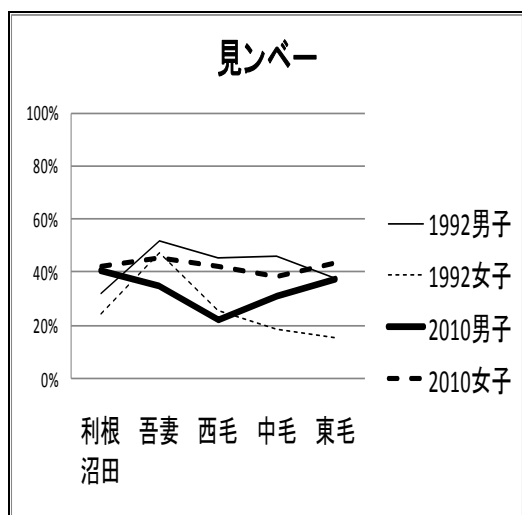
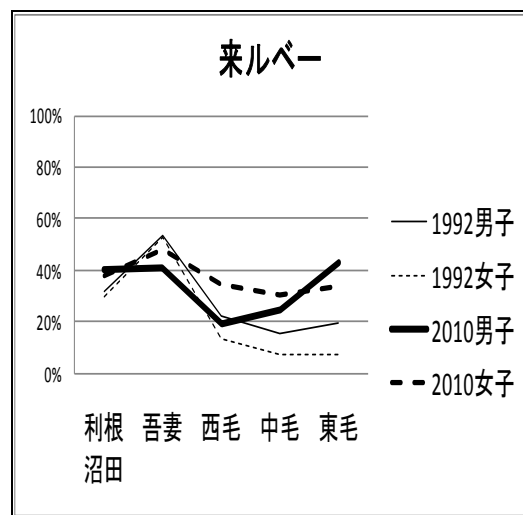
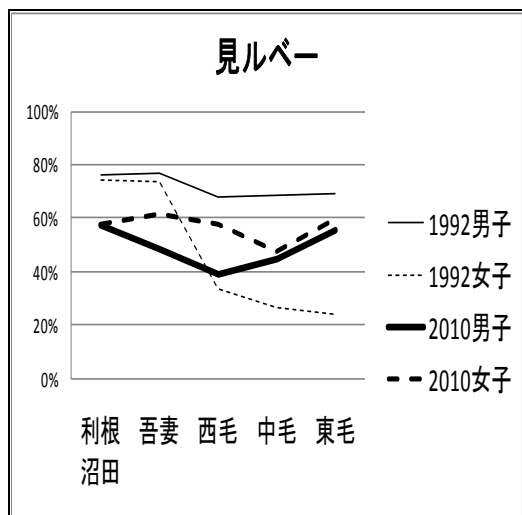
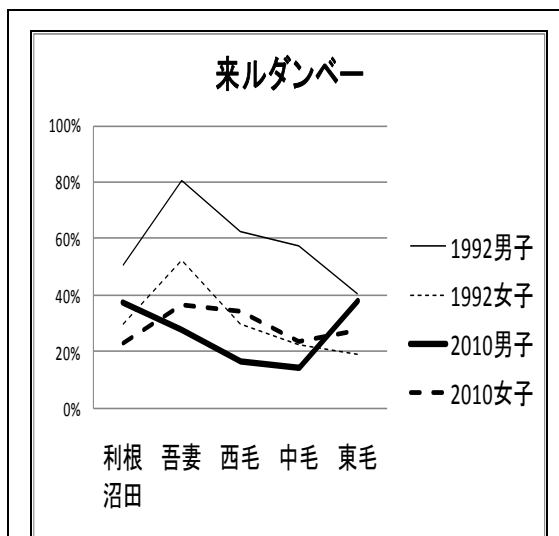
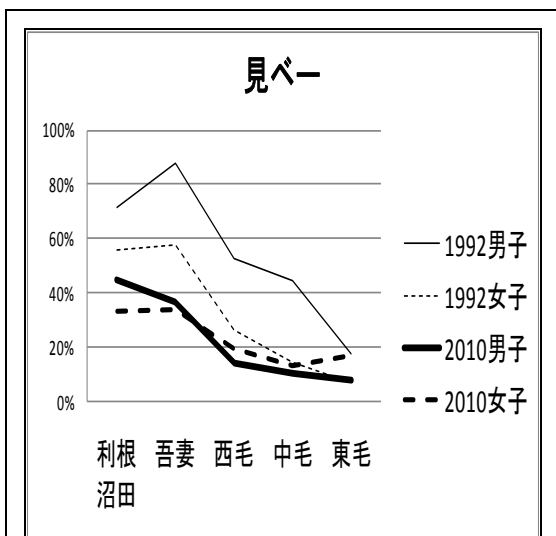
【図6】「犬だろう」使用率の変化

【図6】は、「犬だろう」をくだけた場面で言う場合の「犬ダンバー」、「犬ダベ」の使用率の変化を表した図である。第1回調査の調査項目にはないため、第2回調査と第3回調査の比較となる。動詞、形容詞の推量では上述のようにダンバーからベーへの交代が進行中であったが、名詞の推量では、ダンバーからダベに切り替えが進行中のようである。

以上より、推量のベーにおいても、1980年～1992年に、新方言のンベーが見受けられるようになり使用を伸ばした。1992年～現在では、意志・勧誘と同様にベーの使用が減少傾向にあるものの、推量のダンバーからベーへの交代と動詞や形容詞への単純接続(例：来ルベー、オモシレベー)は進行中であると言えよう。

7. 女子若年層に見るベーの新たな動き

ここまで男子若年層のベー類の使用の変化に着目してきたが、その背景には「男性は女性に比べてベイことばを保持している傾向が強い」(篠木 1994:107)という認識から、ベーの使用に関する研究が男性の使用を前提になされてきたという実情がある。しかし、近年、2005年前後の女子若年層での方言ブームなどを背景に女子若年層における方言使用に関する研究も盛んである。ここでは、第2回調査、第3回調査の女子若年層のデータも使用し、ベー類の使用に関して男女の使用率の差に注目する。



【図7】「見よう」使用率の男女差

【図8】「来るだろう」使用率の男女差

まず、意志・勧誘のべー類について見てみよう。【図7】は、「見べー」、「見ルべー」、「見ンべー」⁵⁾について、第2回調査と第3回調査の男女別使用率の図である。どの形式でも第2回調査では男子の使用率が女子を比較的大きく上回っている。しかし、第3回調査を見ると、古い形式「見べー」では西毛、中毛、東毛で、べーの接続の単純化と考えられる新しい形式「見ルべー」と新方言「見ンべー」ではすべての地域で、女子の使用率が男子を上回っている。現在はべーの使用に関して女子が男子をリードしている傾向が見て取れる。なお、「行こう」の「行クべー」、「行クンべー」でも同様の傾向である。

次に、推量のべーについても見てみよう。【図8】は、【図7】と同様に、「来ルダンべー」、「来ルべー」「来ルンべー」について第2回調査と第3回調査の男女別使用率を表した図である。推量でも、現在、吾妻、西毛、中毛で、女子が男子をリードしている傾向が読み取れる。

意志・勧誘と推量のべー類の使用において、共通に女子が男子をリードする傾向を見せる地域は、吾妻、西毛、中毛である。県庁所在地の前橋市を擁する中毛と群馬県の交通の中心地・高崎市を擁する西毛でのこの動きは、おそらく群馬県周辺部に広まると予想され、隣接する吾妻が「見べー」を除き中毛、西毛と同じ傾向にあるということは、まさにこの動きの広がりと捉えることができよう。

以上、1992年～現在の新たな動きとして、女子若年層がべー類を男子若年層と同程度あるいはより多く使用する傾向を見ることができた。この傾向は、方言の「アクセサリー化」あるいは「おもちゃ化」といった現象と関係があるのではないかと考えられる。

小林(2004)は、若者の間で、方言はいわば共通語の中に散りばめられた「アクセサリー」的なものとみなしていると指摘し、方言を「スタイル」として包括的な変種ではなく「要素」として使用されるとする。従来、群馬県において、ご当地方言の象徴的存在であるべー類を女子若年層が男子と同様にあるいはそれ以上に使用することは考えにくかった。しかし、小林(2004)が述べるように、方言の使用が「スタイル」としてではなく「要素」としての使用と考えれば、既成の考え方は古くて土着的で男性的なイメージのべーも、若年層女子においては、自分の言葉を新しく斬新に飾ってくれるアクセサリーとなり得ると考えられるのである。

また、田中(2010)は、「現代が方言の「おもちゃ化」の時代を迎えている」(田中 2010:483)と述べ、方言の「おもちゃ化」を

「方言」を目新しいもの、おもしろいもの、価値あるものとして、それが生育地方言であるか否かを問わず、表現のバリエーションを広げたり、楽しんだりすることを主目的に採用・鑑賞する」という「方言」の受容態度と言語生活における運用態度のこと(田中 2010:484)と定義する。ここでの傾向を、群馬県の女子若年層が地元方言であるべー類をバリエーションを広げたり楽しんだりするためのツールとして使用し始めた現象と考えれば、まさに女子若年層によるべーの「おもちゃ化」なのである。

8. まとめ

1980年代～現在までの30年間において、群馬県方言におけるべー類は、新方言ンベーの発生や推量のダンベーからべーへの切り替えと接続の単純化、「アクセサリー化」や「おもちゃ化」など、形式面・文体面で様々な変化を活発に起こしてきた。これらの変化に、べー類が衰退していく姿と共通語化にあらがい群馬県方言の中に根強く生き続けようとする姿との両面を見ることができよう。今後も継続した観察と考察が必要である。

注

- 1)井上(1984)は、平山(1961)及び『方言文法全国地図』（GAJ）準備調査の結果である国立国語研究所『表現法の全国的調査研究』、国立国語研究所（1981,1982,1983）をもとにべー類の全国的分布の概要を把握している。そこでは、べー類の分布を「東北地方一帯(山形県日本海ぞいを除く)、関東地方全域(東京付近を除く)、伊豆諸島の一部、新潟県東南端、長野県秋山郷、山梨県東部、静岡県東部」としている。
- 2)本論文「調査地域」の利根沼田、吾妻、東毛の一部である。
- 3)注1の文献
- 4)佐藤(1994)では、新方言を、東京でもある地域でも新方言の傾向を示す「東京型」と東京では使用されずある地域でのみ新方言の傾向を示す「地方型」とに分類し、それぞれの伝播の特徴を述べている。
- 5)「見ルンベー」は省略するが、第2回調査では、吾妻を除き、男子の使用率が女子を上回り、第3回調査では、吾妻、西毛、中毛で女子の使用率が男子を上回っている。

付記・謝辞

本論文は、佐藤(2011a)を加筆修正したものである。執筆にあたり、日本語学会及び社会言語学会の皆様にご指導いただいたことを申し添え、それらのご指導に感謝申し上げます。なお、本論文は「大都市圏言語の影響による地域言語形成の研究」(平成20年度～平成22年度科学研究費・基盤研究(C) 研究課題番号：20520412 研究代表者・岸江信介)の研究成果でもある。

30年間で3回にわたる経年調査において、多くの高校生及びその保護者の方々にアンケートにお答えいただき、調査実施にあたっては多くの学校関係者の皆様にお世話になった。また、本研究にあたり、小林隆先生(東北大学大学院教授)、井上史雄先生(明海大学教授(当時))には、お忙しい中、ご指導、ご助言を賜った。さらに、過去のデータの変換では小柏伸夫氏(共愛学園前橋国際大学准教授)にお世話になった。その他にも多くの方々にお支えいただいた。ここにあらためて皆様にお礼申し上げます。

参考文献

- 井上史雄 (1984). 現代東日本のベイの分布と変化 東京外国語大学論集 34
- 国立国語研究所 (1981,1982,1983). 方言文法資料図集(1)(2)(3)
- 古瀬順一 (1997). 日本のことばシリーズ 10 群馬県のことば 明治書院
- 小林隆 (2004). アクセサリーとしての現代方言 社会言語科学 7(1)
- 佐藤高司 (1993). 《新方言》の動向—北関東西部における高校生のことばの研究— 私家版
- 佐藤高司 (1994). 北関東西部における新方言の伝播の特徴 語学と文学 30
- 佐藤高司 (2011a). 群馬県方言におけるべーの動態—若年層に対する 30 年間の経年調査から—
日本語学会 2011 年度春季大会予稿集
- 佐藤高司 (2011b). 群馬県方言の社会言語学的研究—30 年間の若年層における方言使用の動態
平成 23 年度東北大学大学院文学研究科博士論文
- 篠木れい子 (1987). 群馬の方言 群馬県教育委員会
- 篠木れい子 (1994). 群馬県方言における意志・勧誘・推量表現の考察—「ベイことば」の諸相
と変化を中心に— 群馬県立女子大学紀要 15
- 篠木れい子 (2008a). べいべいことば 群馬新百科事典 上毛新聞社
- 篠木れい子 (2008b). 方言 群馬新百科事典上毛新聞社
- 田中ゆかり (2010). 「方言コスプレ」にみる「方言おもちゃ化」の時代 首都圏における言語
動態の研究 笠間書院
- 平山輝男 (1961). 東部方言概説 方言学講座 2 東部方言 東京堂